

読売新聞 きょう（10月16日）のイチ押し

1面・社会面 非正規格差で最高裁が違法判断 郵便局の手当や休暇

郵便局で配達業務に当たる非正規雇用の契約社員らが正社員との格差是正を求めた訴訟の上告審で、最高裁は「待遇格差は違法」との判決を下しました。日本郵便には非正規雇用の従業員が約18万5000人おり、今後は待遇改善が求められそうです。

- ★ 問題になったのは、年末年始勤務手当や扶養手当、夏期冬期休暇などで、最高裁はこれらに「不合理な格差がある」と判断しました。
- ★ 一方で、賞与や退職金が争点となった別の訴訟では、最高裁は非正規雇用の原告の訴えを退けています。職務の難易度や責任の重さ、配置転換の可能性などを考慮し、「不合理とはいえない」と判断しました。正規と非正規の業務内容の違いで判断が分かれる結果となりました。

1面など 米の中国排除策、参加見送り 日本が伝達

通信分野などのネットワークから中国企業を排除するトランプ米政権の計画について、日本政府が、現時点では参加を見送る方針を米側に伝えたことがわかりました。本紙の特ダネです。

- ★ 日本は、中国経済への依存度が米国よりも大きく、米中対立に巻き込まれて中国を刺激することを避ける狙いがあるとみられます。計画が修正されれば再検討するという立場も伝えたようです。

他紙と比べて

第一線で活躍する作家が読売新聞に掌編小説を書き下ろし、ファンと創作秘話などを語り合う「よみうり読書 芦屋サロン」。今回は大阪府寝屋川市在住の直木賞作家、門井慶喜さんの作品「武士の農法」を掲載しています。普段なら紙面掲載後に、作者を囲んで読書サロンを開催しますが、新型コロナウイルス感染拡大の影響で見送りに。代わりに、読者の皆さんの感想や質問を募集し、記者が門井さんにインタビューします。その模様は、11月の新聞紙面と読売新聞オンラインの動画でお伝えします。